

曲目解説

Syrinx

シランクス

Claude Debussy（1862–1918）　クロード・ドビュッシー

曲目解説

Syrinx シランクス

Flûte seule, L. 129 ／ 無伴奏フルートのための

Claude Debussy（1862–1918） クロード・ドビュッシー

作曲・初演	1913年、パリ。フルート奏者ルイ・フルーリーが初演
原曲の編成	フルート1本（無伴奏）
調・拍子	変ロ短調の調号・4分の3拍子（終わり近くに4分の2拍子）・Très modéré（とても穏やかに）。35小節、2分半ほど
この楽譜	Roside Edition 浄書（IMSLP、CC0）から入力し、Jobert 1927年初版と照合

作曲者

クロード・ドビュッシーは、パリ近郊のサン＝ジェルマン＝アン＝レーに生まれ、10歳でパリ音楽院に入学、1884年にローマ大賞を受けました。

長調・短調の決まりにとらわれない和声や、全音音階、東洋の音階などを取り入れ、光や水、風のうつろいを音で描くような、新しい響きを切り開きました。1889年のパリ万国博覧会で聴いた、ジャワのガムラン音楽からも、大きな影響を受けたといわれます。

代表作に、『牧神の午後への前奏曲』（1894年）、オペラ『ペレアスとメリザンド』（1902年）、管弦楽曲『海』（1905年）、ピアノ曲『月の光』などがあります。『牧神の午後への前奏曲』も、フルートの独奏で始まる曲で、牧神とフルートの結びつきは、ドビュッシーにとって大切な題材でした。

曲の成り立ち

1913年、詩人ガブリエル・ムーレの劇詩『プシシェ』のための付随音楽として書かれました。劇の中で、牧神パンが吹く笛の調べとして、舞台の陰から吹かれた曲です。
ドビュッシーがこの劇のために仕上げた音楽は、この1曲だけでした。

初演したのは、親交のあったフルート奏者ルイ・フルーリーで、曲は彼に献呈されています。このときの題は『パンの笛』（La flûte de Pan）でした。ドビュッシーの生前には出版されず、1927年にジョベール社から『シランクス』の題で出版されました。初期の歌曲『パンの笛』（『ビリティスの3つの歌』の第1曲）と区別するために、題を変えたとも考えられています。

無伴奏フルートの曲としては、18世紀のC. P. E. バッハのソナタ以来の重要な作品とされ、20世紀のフルート独奏曲の出発点となりました。

シランクス（シュリンクス）は、ギリシャ神話の水の精（ニンフ）の名です。牧神パンに追われた彼女は、川辺で葦に姿を変えて逃れました。パンが、風に鳴るその葦を切って束ね、作った笛が「パンの笛」です。葦や竹を切って作る笛という点で、篠笛とも遠くつながる物語です。

曲調と聴きどころ

冒頭の、細かく揺れながら下りていく短い動機が、曲全体のもとになっています。この動機が、形を変えながら何度も現れるので、即興で吹いているような自由さの中にも、しっかりとしたまとまりがあります。

調号は変ロ短調ですが、半音階や全音音階が多く、調ははっきりしません。拍子も、3連符や付点のリズムが入り組んで、拍を感じさせない、漂うような流れになっています。作曲者が書き込んだ息継ぎの記号と、「Retenu（ためて）」「Cédez（ゆるめて）」「Rubato」などの細かな速さの指示が、そのまま音楽の呼吸になっています。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜8	冒頭の動機。高い音域でゆるやかに揺れ、8小節の Retenu で、ひと区切り
9〜25	Un peu mouvementé (mais très peu)（少し動きをもって、ただし、ごくわずかに）。 動機が低い音域で展開し、Cédez、Rubato と揺れながら、トリルを経て、25小節の高いシ♭へ
26〜35	au Mouvt（最初の速さで）。冒頭の動機が戻り、dim. で下りていく。最後は全音音階で一段ずつ下がり、 Très retenu、perdendosi（消え入るように）で、低いレ♭にたどり着いて消える

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　変ロ短調（調号）

調号は♭が5つ。ただし半音階や全音音階（全部が全音でできた音階）がたくさん出てきて、
調ははっきりしません。これがドビュッシーらしい、ぼんやりと漂う響きを生んでいます。

拍子　4分の3拍子

3拍子ですが、3連符や付点が入り組んで、拍をあまり感じさせません。楽譜の息継ぎの記号（'）は、
ドビュッシー自身が書いたものです。

速さの指示

Retenu（ためて）、Cédez（ゆるめて）、Rubato（自由に）など、フランス語の細かな指示が、
そのまま音楽の呼吸になっています。

篠笛の楽譜と調について

　同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	変ロ短調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。イ短調（原曲より半音下）、チューナーの基準A＝431Hz（全体を45セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026